

小児骨折

—見逃さないために—

introduction

外傷治療が整形外科診療の基本中の基本であり、研修医にとってはその習得が将来の専門分野診療における成功の重要な鍵となることは言うまでもありません。成人外傷治療においても知見や手術デバイスは日進月歩であって、治療アルゴリズムの変化に対応するなかで、成人とは異なる特有の生理・解剖と経過を踏まえた治療が要求される小児外傷にも対応することは容易なことではありません。筆者が研修医だった頃は、小児骨折に関する成書はほとんどありませんでした。指導医には『Rockwood & Wilkins' Fractures in Children』で勉強するように言われ、自分に経験のない小児骨折患者が外来に来ると医局のデスクまで走ってあの分厚い成書をひっくり返してさっと読み、さもわかっていたかのように患者さんの親に説明したものでした。それはそれでよい勉強にはなりましたが、学ぶことが多い現代の忙しい研修医には少し酷なのではないかと思います。今でこそ小児外傷の良質な成書はありますが、成人外傷に比べればはるかに少なく、また成書は改訂頻度がそれほど多くないので読んでいて内容が少し古いと感ずることも少なくありません。

そこで小児外傷で頻度の高いもののエッセンスをアップデートして1冊にまとめ、研修医が外来で気軽に手に取って目の前の患者さんに対応することに役立ててもらうことを目的に本特集を企画しました。ご執筆の先生方には豊富な症例、特に成績不良例を含めてご提示いただき、小児骨折治療のコツとピットフォールを大変わかりやすくご解説いただきました。

少子化の加速や少子化対策のニュースを連日のように耳にします。つい先日には2022年の年間出生数が80万人を下回ったという報道がなされたばかりです。一方で、学校管理下での骨折が2000年では1970年の2倍の発生率であったとの報告もあり、現代の子供の骨折は増えている、あるいは骨折しやすいとの報告は散見されます。それも問題であり別の対策が求められますが、小児外傷患者数には地域差があらうものの、個人的には増えこそすれ、減っている実感はありません。読者の先生方が今後も治療機会が多いであろう小児骨折を学ぶ一助となることを願っております。

流山中央病院
國吉一樹